



羅針盤



青山 裕美
Yumi Aoyama

川崎医科大学皮膚科 教授
Visual Dermatology 編集協力者

皮膚科の反射神経

あなたは考えることができる人ですか？ あまり深く考えないほうですか？

忙しい毎日の診療で、考えずに反射神経で対応する時があります。反射神経型の診療は、診療という一連の行為を効率化するには非常に有効な手段ですが、3つの落とし穴があるので注意が必要です。

反射神経だけで対応していると、

1. やる気がなくなる(前頭葉を使いましょう)
2. そのうち古い人になってしまう(適度に更新しましょう)
3. 大失敗をすることがある(パツと見て間違えないよう慎重になりましょう)

私は考えるのが好きで、効率化することも大好きです。ですので、いつも自分の思考や作業のプロセスを明確化して、自分はなぜその患者さんに対してその選択をしたのか分析して、省略できるところを探索しています。しかし、上記の理由から常に反射神経型の診療にならないように注意をしています。

しかし、皮膚科の反射神経が絶対必要な場面があるのです。

それは、救急、緊急、複雑(複数科)そして重症な患者さんを診察するときです。たとえば、日本紅斑熱の患者さんが来院されたときに、その危険なサイン(刺し口)に気づかずに帰宅させてしまったら……？ 大変なことになりますよね。

危険なサインをみたら、迅速に鑑別疾患をあげ、適切な検査、コンサルテーションを含めて適切な対応ができることは、皮膚科医だけでなく、救急医、皮膚をみるすべての診療科の医師に必要な技能です。

丸暗記よりセンスを磨こう

この特集号では、さまざまな危険なサインを掲載していますが、もちろんすべての危険なサインを網羅してい

るわけではありません。丸暗記が必要ですか？ いえ、そうではありません。なぜ危険なのかを考えることが大切です。複数ある危険なサインには共通点があることを理解しておけば、初めてみたサインでも、ある程度無難に対応することができるでしょう。実は、これこそが皮膚科の反射神経(センス)なのです。患者さんの訴えにあるキーワード、におい、形、色、加速度、全身状態、危険なサインなど、五感を総動員して診察するあなたの頭脳の中にあるアラームスイッチを早く確実に押ししてくれるのが危険なサインです。それを知らなくても、他の項目でアラームが鳴るように神経を鍛えておけばよいと思っています。



医療は日進月歩です。ある程度危険なサインに幅をもたせる目的で、本書では古典的なものから、最近美容で話題の危険なサインまで掲載しました。危険なサインをもつ患者は、必ずしも救急室や三次医療機関にやってくるとは限りません。多くのケースが、最初はまずクリニックを訪れ、紹介のもと来院されてきます。明日、あなたの診察室にくる患者さんが、危険なサインをもっているかもしれません。

是非本書を使ってシミュレーショントレーニングをお勧めします。重症化、急変するかもしれない患者さんが一人でも多く救われるように、適確な行動に結びつけましょう。